

関東大震災直後の父ラインホルトからゲルトルートへの手紙

これは、今からちょうど百年前、関東地方を襲った大震災後に、向島福音教会と鐘ヶ淵幼稚園で奉仕をしていたゲルトルート・キュックリヒ先生に、ドイツで福音教会出版局の主事をしていた父ラインホルト・キュックリヒ牧師から送られた手紙である。オリジナルはロイトリンゲンの神学校に保存されているが、翻訳は *Treues Haushalten. Ein Lebensbild von Ernst Reinhold Kücklich. Prediger der Evangelischen Gemeinschaft. Verfasst von Dr. Reinhold Kücklich. Lehrer mit Predigerseminar zu Reutlingen. In Verbindung mit Gertrud Kücklich. Missionarin in Tokio, Japan, 1933 Stuttgart: Christliches Verlagshaus G. m. b. H., S. 172-3* によった。

父の愛が溢れ出る内容の手紙である。今のように電子メールのない時代に家族がどれほど極東の地にいる娘を心配していたかが伝わってくる手紙である。しかし伝道者の父は、娘が無事であったことを神に感謝し、早くドイツに戻るようにと伝えるのではなく、日本に留まり伝道者としての使命を果たし、日本人々に仕えよと書く。伝道者である父から伝道者である娘への深い祈りに基づく手紙である。

一九二三年の関東大震災後の父からの手紙

一九二三年一月一日。

「いと高き神のもとに身を寄せて隠れ、全能の神の陰に宿る人よ、主に申し上げよ。「わたしの避けどころ、磐、私の神、依り頼む方」と」「詩編九一篇一〜二節」(註1)。この詩篇の言葉が、日本から恐ろしいニュースが飛び込んでくるたびに、天文学的な数字の死者数が知らされることに、同時にこの言葉が私の魂の中で何度も何度も鳴り響き、その度に私はそれをかみしめました。なぜなら、私たちのゲルトルートが今まさに災の只中にいるのですから。

私たちは確かに内なる慰めと平安を得ていたのですが、しかし時には深く不安に襲われました。おまえが夏の間は、涼しい山荘で休暇を過ごしているということは知っていました。けれども、八月二〇日付の手紙では、九月二日から、再び東京での仕事に戻ると書いてありました。だから、おまえが、三〇日か三十一日に東京に向かい、まさにこの大災害と遭遇したはずだと、私たちは話していたのです。私たちはおまえが生きているという知らせをただひたすら待ち続けていました。教会の人々が、遠くや近くにいるおまえの友人や親戚が、おまえの安否についての確かな情報を待ち焦がれていました。私たちはその時まで何も知ら

されていなかったのですから。九月が終わり、そして一〇月が過ぎて行きました。でも何の報告もないのです。一三日も他の日と同じように、過ぎ去って行きました。(その日は覚えていましょう。おまえの父の誕生日だったのです。)アメリカからも何の情報もありません(註2)。でも、ついに、『クリスチャン・エンデバー』誌の中に、メイヤー牧師(註3)の電報を見つけたのです。そこには「宣教師たちはみな無事」と書かれていました。これは、闇の中の一筋の光でした。私たちはベルリンの外務省にも手紙を出して尋ねてみました。そちらからの返事では、神戸(のドイツ)総領事館からベルリンに報告されたドイツ人犠牲者の中におまえの名前はなかった、ということでした。これらの情報から、直接的な報告ではないですが、私たちはおまえが生きっていると確信していました。しかし、一〇月も終わり、私たちはおまえが生きているという直接の報告を受け取ることをますます強く願っていたのです。そうこうしているうちに、だいぶ前に書かれた手紙(大震災の前に書かれたものでしょう)が最近届きました。一月四日に受け取りました。おまえからの誕生日カードでした。私はそれを読んで感謝の思いでいっぱいになりました。また、「思い出」と題されたとても素敵なおまえの書いた詩も読みました。そのどちらも、このあともおまえの手紙を待ち続けてよいのだという想いを確かなものにくれましたし、大震災後に最初にくれたおまえが生きているのだという命の兆しとでもいうべきものでした。

そして何とということでしょう。私たちの望みは確かに砕かれることはなかったのです。先週の月曜日、一月一二日、三通の郵便物がまとめて届いたのです。八月二四日付の手紙、そして九月三〜七日付の手紙、そして九月一五日付のハガキです。そして、わたしたちは、おまえが元気であること、そしておまえが被災した場所にはいなかったことを知りました。ああ、主の驚くべき御守りに感謝しているのです。神はおまえのために大いなることをなしてくださったのです。主はおまえを、おまえ自身の奉仕のために救い出して下さったのです。ですから、おまえは、日の出るその国にとどまって、主イエスのための一筋の太陽の光となるのです。主イエスの愛と恩寵を伝える十字架の宣教師となるのです。主が、おまえと他のおまえの同僚宣教師たちに聖霊の賜物を備えてくださり、協力して、人々に神の大いなる祝福をもたらすことができますように。

私たちは、おまえからのさらなる続報を心待ちにしています。また、『福音の使者』誌や『宣教の友』紙(註4)に記事を書いてもらえたら大変にありがたいと思っています。私たち福音教会の国内外の交わりはとても大きなものです。日本の宣教師や教会の方々のために、特別な祈りの時間が計画されています。私のところにはさまざまな方面から、問い合わせが来ています。私たちはよく知っているはず。一人が苦しめば、すべての人が共に苦しむのです。

ですから、もし可能なら、おまえが経験したこと、見たこと、あるいは再建の

ためにどのような奉仕が必要なのか、ぜひ書いてください。それでまた！

註1 これは、新共同訳聖書からの引用。原文はルター訳聖書からの引用で、「いと高きお方の御護のもとに座し、全能者の陰にとどまる者は、主に向かつて言う。「わたしの確信、わたしの誓、わたしの神、わたしの信頼する方」と」となっている。

註2 キュックリヒ先生はドイツ人であったが、アメリカの福音教会の宣教師として来日していた。

註3 日本の福音教会の監督であったP・S・メイヤー牧師のこと。

註4 父ラインホルト・キュックリヒが主事として責任を負っていたドイツの福音教会の出版局から出ている雑誌。キュックリヒ先生はしばしば寄稿していた。